

源氏物語類聚

卷之七

027
77
2

027
77
2



依り
かかおる信
とあまのつとめ

ち女の古記をいりてお経つとらふとて
 一 是とては田舎と
 弱くも人それかそをあらはさす
 一 此はつとめにおに
 是れもやんば種のおのせつとて
 保ころひはまはしむおの
 世を子しふり兼とらふの
 一 是れは女を招く婦人にて
 あり
 一 是れは社わひ
 一 是れはつとめに判はるるおの
 物あり
 一 是れは
 一 是れは
 一 是れは
 一 是れは

ちや此はのあ手に王とて振業の体はつゝもさきよのせしめ
 せしむるなりし一おねあゝもさきよの業はつゝもさきよの
 さきよのせしめなりし一を業はつゝもさきよのせしめ
 たりしなりし一もさきよのせしめなりし一を業はつゝも
 さきよのせしめなりし一を業はつゝもさきよのせしめ
 自ら書一もさきよのせしめなりし一を業はつゝも

文取十三夜実末一と云々口

獨り居て

蒼虬

ちうこれいおさるにちりぬ里新橋
 雲斜のとさかぬの斤而
 帝雉子牙二粒之粒留うけそ
 ちうちりちみさけ味さ祓さく
 ちうちりち稱さめさ音能存
 柔不性りさる肌の次

鷹鵬
 虬鵬
 鵬
 鵬

昔はつとつとを語つてあふふ
 せつしよの報復のふ断きつてあふ
 祝日の餘の條よりはまけて
 念ふにやあるものぬき出し
 湯も入ると枕を扱す本をいぬ
 熱回ふ乃あてて手離るぬの
 聖下り能く書をよまつて配るる
 海とてさびきつるる語は口
 札 碁 札 碁 札 碁 札 碁

凡そきりまけの語をいつては
 意のはう二度に交來致
 古ひきの河海も條よりはまけて
 日和まじりてあふもの 木を
 手も入るとつと相海にいぬ
 熱入茶一もひいぬのせ
 手ひ獵をさると碁綱よりかたけ
 所信約くはせる 細語
 札 碁 札 碁 札 碁 札 碁

自才亦能牙慈愛つけ句いせて
鏡ありんと柱ろけよ物
牙人ま程てまはひ集と忘
まはひ集とけん心未ふ 在つ
まはひ集とけん心未ふ 在つ
十二銅とくあけぬお菜 一
破る故の葉角まきくは月さ
まはひ集とけん心未ふ 中 砂の破

破 破 破 破 破 破 破

まはひ集とけん心未ふ 樽大工
鏡ありんと柱ろけよ物
牙人ま程てまはひ集と忘
まはひ集とけん心未ふ 在つ
まはひ集とけん心未ふ 在つ
十二銅とくあけぬお菜 一
破る故の葉角まきくは月さ
まはひ集とけん心未ふ 中 砂の破

破 破 破 破 破 破 破

所かゞや夕めくしてきて暮乃る
 夜し
 おろや~~~~かこの 釣る
 心水
 珠球を一寸と帆をさるれ出て
 し
 彩一广く思くハ彩巻あ旅の
 水
 指打ていととをさる月のうけ
 し
 又操風てのり 念中
 水

赤壺の中梨大さく手はらて
 し
 柔性通りなり成く 新宅
 水
 故に牡丹娘の欠きす茶あり呉以
 、
 枕をりハ安のありあし
 し
 和借に想ひ込さる 江 戸 化
 水
 穉多涉しぬあ寸 建ちん
 し
 今も了社におひ来く夕月東
 水
 角力引てふこそ人 結業する
 し

カヒタニク 虫と扇め 三ツ寸程
 寸ととひく 空し 虫は飛来す
 狂ふの 馬鹿なり 末々も 日の水さ
 墟 けりて 流ふ 手のひ 羅
 し 出

欠て 君と 昔返り 二舟 舞 一々
 木の 芽なり かけ けう ゆき
 控 書し

遠かこの 節り せらる 虫れり
 研ひく うちを 蓋に 三三へ 日
 ひよりの 川 海 度も さら 月 乃を 終
 つらつら は ぢま やう ちま
 変相の ぬ 袖の 鮫の 編う ちま
 ちま ちま ちま ちま ちま ちま
 ひつま ちま ちま 親 音子 打 込ん ち
 とめ 隔 帽の 上 ち 小 ち 又
 し 生 し 生 し 生 し 生

意いーを丹目せて扱つてを

未の四五番いらく犀角

あさけるかやうは五月さし

土用あうく船西爪くさ

田樂ろ小屋さなうくとま守縮

あつちこち月白無々降る

花のけりあうてまいつく名張とへ

いさういさうあまは海乃かつて

、
光

光

光

光

光

光

光

梅うや第一さき乃無んいふ

春の小海の鉢ちうつく

うは弥や無子とつかり松あや

わのさり呑んく酒の節定

は舟板こくくあうとら船思ひ

あう手渡さく足さく坂の白

西月

光

光

光

光

光

物干し上りしはる塔の先
 肉儀のそり味り膳らふ
 新嘗り天門を結吟ひころ
 敦國菜いよし庭 返上
 衣履を衣り他物の下りあ
 深ひ着る所を併覧しる色
 ちし里も杜丹の月よひつり
 昔しお保りし為末の集り方
 月 月 月 月 月 月

ひるせりしはしと物うらふ原を
 木環らうひふ 大 戸了てあ
 降るるを促さる 花のそり
 志しははるのうにましく
 月 月 月 月

葉とまのびひりつゝ也梅をふ 喜し
 冬木をぬる庭梅の 園のうめの花 ^{十二六} 心沙
 やさしきつてなれは明きき 柳うる 一生
 掬りてふ ありぬる搦む蔵は 必承
 福喜子あゆむや 程の中へ疾に 懐又
 欠世也ーとらとら餅屋にほせとらふ 魚子
 うらひ寸也 謝てまをゆす 勝負む 巨保
 書くある柳一畫乃 柳 ^{サカイ} 権助

子と子のねやうふとよの 雨 昔我
 漱きこして蒸の出て あり葉う草 草風
 舟やせんまをとりちり 明の春 米汁
 是はけるらふく籠てうめ枝をを 枝赤
 三合の泥出 喜うとそゆす 米糖
 ありはよや也 梅枝はのそとこあり 喜信
 喜のやや けしつ即ちの 秋うらん 風也
 つい枝をほつゝの 柳を 杜若

秋草スマ 小便スマ 飛スマ 西月スマ

よひ面イタミ 煙イタミ 人イタミ 叶イタミ

多タカ 葉タカ 葉タカ 葉タカ 葉タカ

ちやイセ 葉イセ 葉イセ 葉イセ 葉イセ

枝エダ 葉エダ 葉エダ 葉エダ 葉エダ

唱ウタ 葉ウタ 葉ウタ 葉ウタ 葉ウタ

山ヤマ 葉ヤマ 葉ヤマ 葉ヤマ 葉ヤマ

うめウメ 葉ウメ 葉ウメ 葉ウメ 葉ウメ

夕タチ 葉タチ 葉タチ 葉タチ 葉タチ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ 葉ハ

梅々のほろり沈む 池乃流 ^{アハ} 大管
 松乃雄辯をむく ^{アハ} 大管
 若凡の徳と解ふ ^{アハ} 柳涯
 かへり甘厚く ^{アハ} 梅の也
 梅公一雪牙 ^{アハ} 月 鎮つ
 葉や 袴着て 堀の門 ^{アハ} 扇眠
 ぬえり ^{アハ} 抱へる ^{アハ} 志ふ良 ^{アハ} 志長
 ちと ^{アハ} 也 ^{アハ} ひ ^{アハ} び ^{アハ} り ^{アハ} 骨 ^{アハ} 折 ^{アハ} 娘 ^{アハ} の ^{アハ} 子 ^{アハ} 多 ^{アハ} 秋

うき ^{アハ} ぬ ^{アハ} す ^{アハ} や ^{アハ} の ^{アハ} 山 ^{アハ} と ^{アハ} て ^{アハ} 川 ^{アハ} さ ^{アハ} えて ^{アハ} 太 ^{アハ} 丈
 山 ^{アハ} か ^{アハ} こ ^{アハ} 牙 ^{アハ} う ^{アハ} ら ^{アハ} れ ^{アハ} 込 ^{アハ} ぐ ^{アハ} お ^{アハ} ち ^{アハ} 椿 ^{アハ} 堂 ^{アハ} 頂
 較 ^{アハ} 嘉 ^{アハ} 奈 ^{アハ} 良 ^{アハ} 登 ^{アハ} 坂 ^{アハ} の ^{アハ} 大 ^{アハ} 母 ^{アハ} 居 ^{アハ} る ^{アハ} 春 ^{アハ} 五 ^{アハ} 芳
 回 ^{アハ} 一 ^{アハ} 事 ^{アハ} 以 ^{アハ} ち ^{アハ} ぬ ^{アハ} 々 ^{アハ} と ^{アハ} 枝 ^{アハ} 々 ^{アハ} ぬ ^{アハ} ぬ ^{アハ} ら ^{アハ} 雪 ^{アハ} 之
 雲 ^{アハ} り ^{アハ} や ^{アハ} 腋 ^{アハ} 接 ^{アハ} お ^{アハ} る ^{アハ} す ^{アハ} 凡 ^{アハ} 々 ^{アハ} の ^{アハ} 中 ^{アハ} 元 ^{アハ} 山
 見 ^{アハ} ざ ^{アハ} り ^{アハ} 一 ^{アハ} 帯 ^{アハ} 巻 ^{アハ} し ^{アハ} 巻 ^{アハ} に ^{アハ} ぐ ^{アハ} り ^{アハ} 也 ^{アハ} の ^{アハ} 雨 ^{アハ} 碩 ^{アハ} 布

保のくもりなる戸はさるる能 戸ハ 歸里

あまのくみのまを利るのに蝉の春 梅子

新くの掃除ちうもあまのまの 春梅

涼れあまのまをれなる事の時也 涼宇

玉盤のまをくく見へてともあま 雪頂

木の下の木のまをまの 峰 直村

くもる舞やぬま舞子に男 魯人 ハル

女とみつるまをちてま 以文

可る春の小も 二 三人 葵堂

下にまをまはくく兼、ま舞を 周権

まうくも後まはくくま 牡丹哉 文マ

おちて了れまはま 東甲のまを 春中

みくも夜を引かみくも 碓の浪 尺ナ 子音

不掃除なまをまのま敷やまき 兩 梅周

ま士にまをまのま 木古 相守

まをまをまのまをま 春中 梅女

ひそり子の能又とまろくまの申 七才 龜女

東の清ちの集りふ虫とのかち 七才 花竹

故やうや夫婦 七才 岳龍

今一ふふ 七才 林云

半妙の世や 七才 花梅

釣り子の見せ 七才 霞頂

白牡丹 七才 肢梅

灯りの 七才 狩也

馬坊 七才 菅五

穂之部

栢のり 十三ハ 高志

い 十三ハ 井眉

手 十三ハ 藤岨

あ 十三ハ 松隣

何乃木りかまそすあるは秋の香 祇白
 去々まゝやたゞしく雲はまれば 照道
 照仕事や一身あつてはる中か 一山
 照月にもあり動くぬ禁 我 秋葉
 おと水庵は流あ木いそ高し 植子
 こけりる木も秋じや虫の中 ^{イヌミ} 鳴く
 天ささぬさあまらあゝゝむの折 ^{ロタセ} 竹く
 松をさき善あゝ踏歩く丹足 ^{カメ山} 型揚

鶯頭の只子細あまあうそ車 ^{ノヒ} 其鳥
 向交やの秋の日はり秋の香 ^京 十丈
 秋とんや人義一秋 世 夕 ^夕 夕
 京そのの秋も隠しておもた ^{大ツ} 宋齊
 菜ふくちれて寒もも車にんま ^さ 菜
 菜こくに下さゝや秋の香 ^{スマ} 菊
 花さや横さつれて月のや ^志 存
 唯あゝと故りそ来文し後のく ^{イセ} 和峰

日光

此山を出一と粟の況也川 エト 思ふは

秋まことのまゝをてはありけ李 秋 秋

飛のまををえて来て待やまの舟 オハリ 而后

立待たるゝやそれれを懐も油 タメ 史友

うさひまのうゝかく峰の子を ヒツヤ 太ら

若も妻の毛さるや月夜の位員 アチ 栗青

いゝゝのよまは是坊も江の芭 アチ 長丰

葉の香や机乃と秋 サメキ 葉凌子

玄海の上は世事 サメキ 今是

秋る中思ひありて小葉 サメキ 一貫

植ゝ樹又楮柱 サメキ 和切

大藪乃裏身 サメキ 秋の川

秋寒や役目 サメキ 出用

はつ種 サメキ の凡 サメキ 扇 サメキ 出 サメキ たり

移 サメキ り サメキ や サメキ き サメキ ら サメキ へ サメキ て サメキ 渡 サメキ る サメキ 小 サメキ 板 サメキ 橋 サメキ 淇 サメキ 蝶

丈けく秋陰や小松り愁る月 碧尾
 はいそこの竹の中くうらさの秋 ヒシコ 雪塙
 吹れて空を秋を返すや秋の也 古夕
 とも来て只あふたし〜夜は 西岸
 海はゆる所りあふや秋の山 節居
 月のある橋へ花をむいるこ鼓 儿偶
 風も〜やりの出る〜ちの〜り 西崦
 三浪の目あふまらや花すき 茶隠

名くの〜と抱く 高杉 惟 時雨花
 時ふとや人買たり来る在亦 アハ 梅人
 桐の葉乃十日り落くや又うを 信明
 種す〜まに〜と灯を連るを 道正
 おくの香や板ふりて明る戸一牧 寧泉
 未枯て二見を歸る 柳茶
 秋妻のあふか愁る數木は 向葉
 はつ唇のあふ〜る行燈哉 柳園

月正て心るを子つてや一羽 夜岡

三

やうし

わを相や小幟を預ほとを サカイ 此用

ふゆのふまつたにほをき際哉 横路

雲はく松よかや 山 湖葦

咳をふく 山 此才

十一

綱羽のほんねを赤ま小雲形 自樂

あんに浮木の雲く也市の以 氷程

ふをふ 山 穢雪

とをきま 山 世涼

山茶をやまの 山 松子

梢を盡く 山 梅圃

舟を 山 丹桂

煤掃のま 山 復口

六

馬より山乃乃上野火可然 春坡

舟に舟を舟相入る知れぬ舟に 柳糸

鏡けや羽二重習者もはよと 三正

舟に舟を舟とてかろふ不とんふ 徳瓜

川者や只明くくくたる木の葉 菅屋

果人うひけり刻於大根のちま 圭書

愁ふふの葉曜すあそふ白布が 水月

来てくやを山志見やの閑くき 雲頂

法中

法所女中ささささささ可るなり アフリ 白

暖くふ冬や佛のたろく 也 オハリ 沙島

糸係や素ら知るるのふも荒懐 月行

ふふふふふふの下まろり 梅花 一 瓢

おふふふふふふふふふふふふ 番民

謎てのく山彦のひきや叔の涼き 菅者

引くくくくくくくくくくくくく 葉所

白壁のこ出かぬーや雪の影 萩野
 踏臥ふらまゝのひまの可くは 四溪
 手のひら身し書こ流やふとけ 巴文
 相信やとの極本屋もふゆの里 岷山
 あゝ晝のひまーうらる枯尾也 冒作
 野はぬーす口こくすみ 十景 首正
 女又ぬままきしひのふくとけ 井又キ 夕景
 霞の夜を二ツまゝて 嘆 ちんを 玄圃

手にもる木を刀のきやけさるゑ 本堂
 極のこの花へうつる女もふ講 梅古
 心もや流めちこりの病もあゝ 荳苗
 太郎子の下踏まきもあゝまやれ 凡莊
 鳴ふまゝ凡そのか懐を刀に本 文似
 冬それやあゝやまのちうろ石 茶肆
 酒をーの浅くさや和勢 龜文
 雪はもや真言寺のうらー 分メ 草堂

吳くわはあすよふの表は 瘡一
 さら籜を競てりや霜乃如 多熱大
 二葉つる戸口の籜やを此月 寸外
 冬に亂や仰る棒をほつる形 至明
 鉢植をいおせし形の落葉が 道竹
 立ちまゝくくや何ぞ留尾をを 小
 うまくとくく日知るを 枯尾花 ^下 草笠
 寧人若おちけそ又や々の丹 吉原



